

三年半ぶりの作品

今月は岩瀬成子の『あたしをさがして』（理論社・一六〇〇円、一九八七、九）を得た。『額の中の街』（理論社、一九八四）以来三年半ぶりの作品だ。



岩瀬 成子氏

見えてくる（理論社一九七七）のエンディングで、黒く広いとこまでも続く夜の海を泳いで行く魚の自分に対して、「ただ、まっ暗な海だ、朝はだんだん見えてくるもの」と投げかけ

ずれてしまった親達

『あたしをさがして』では、なだらかに変容する時空のなかで、溶解し切らない自己分析的な「あたし」が血のむせる匂いをともなって追っかけられ、追いかける。

した管えに双面性はなくもなかったのだ。夜と朝が自分に関係のない繰り返してあるなら、果

自分たちの結婚を認めない母が倒れて、娘は孫の「あたし」を連れて母の元に急ぐ。ゴールデンウィークの満員の新幹線

のなか、あたしは迷っていた」が最終行である。

「ママ」は、親の反対を押し切って結婚した「パパ」とうまくいっていない。うまくいかない夫婦は、『小さな獣たちの冬』（小学館、一九八〇、絶版）でも『アトリエの馬』（学校図書、一九八二）でも共通するサブモチーフであるが、前者では二世代夫婦がおかしくなっている。

存在し描写されるので、おかしいと思いつめるのにたいぶタイムラグが生じる。

「やっぱり産むことにしたのね。あれだけ子もは一人でたくさんだと言ったたくせに、彼はと言っているの。話してないの。」

「自分で決めたかったのよ。それにあの人が相談してもきこきみはどっちにしたい。きみのしたい方でいいよって言うにきまっているのよ。そしたらこっちはよけい屈折してしまっ。

疑いようがない岩瀬の誠実さ

溶解しきらない自己分析的な「あたし」

岩瀬成子『あたしをさがして』

「額の中の街」になると、明日はあるかのように見えるが、ただ、今日に訣別しなければならず、しかも明日はほほいだらうという構図が提示される。ふりかえってみれば、賞をとったデビュー作『朝はだんだん

てもなく泳いで行く自分だけが残ってしまう。

そんなことなら、「おのが身の開り吠えて」（無村）主客の境をとばらってしまったほうが精神の保全にいい。個人が永劫に個・孤立してしまうと

で、「あたし」は気持ちが悪くなり、途中下車してベンチに横たわる。ハンカチを濡らしてく

また、そして「あたし」の時空が変容する奥深い原因は、二番目の子つまり「あたし」の妹の誕生である。「あたし」は二段ベッドの下に寝ていて、上には三つちがいの何事にもきちんとした三年生の姉みたいな「あ

「あの子」である「あたし」は隣の部屋で、寝かされて聞いていた。猫が赤ん坊を食う血まみれの「現実Ⅱ夢」は、意識されずに「妹の誕生」に端を発しているの

顔が見えたような気がして、二〇ページが進む。気分がよく

「あたし」はそのベッドに寝て、血まみれの追っかけられる夢（？）を見ているところから

「あたし」は、意識されずに「妹の誕生」に端を発しているの

なっていて立ち上がる、売店の向こうを人をかきわけるようにして

「あたし」は、意識されずに「妹の誕生」に端を発しているの

「あたし」は、意識されずに「妹の誕生」に端を発しているの

たしはママが消えたあたりの人混みをじっとみつめた。やっぱ

「あたし」は、意識されずに「妹の誕生」に端を発しているの

「あたし」は、意識されずに「妹の誕生」に端を発しているの

り追いかけていったほうがいい

「あたし」は、意識されずに「妹の誕生」に端を発しているの

「あたし」は、意識されずに「妹の誕生」に端を発しているの

だ。妹はあまりにリアルに

「あたし」は、意識されずに「妹の誕生」に端を発しているの

「あたし」は、意識されずに「妹の誕生」に端を発しているの

「あたし」は、意識されずに「妹の誕生」に端を発しているの

「あたし」は、意識されずに「妹の誕生」に端を発しているの

「あたし」は、意識されずに「妹の誕生」に端を発しているの

「あたし」は、意識されずに「妹の誕生」に端を発しているの

「あたし」は、意識されずに「妹の誕生」に端を発しているの

「あたし」は、意識されずに「妹の誕生」に端を発しているの

間関係のない世界

岩瀬成子の今回の作品は、奇妙にポーランドの作家T・コンウィッキの『ぼくはたれた』（内田莉莎子訳、晶文社、一九七五）を思わせる。慧星が地球にぶつかりそうな明日をひかえて時空は変容し、「つまりどこがおかしいんだ。もしかしたらぼくたち人間は皆、子どもなのかもしれない」と「ぼく」は思う。子どもが子どもでいらなくなってしまう子ども不在の世界と、大人になりきれない大人不在の世界が表裏貼り合わせになっているかのようである。

私たちの日常がほんとは皆んな大人半分子ども半分であり、女半分男半分であったりするものだから、つまり大人・子ども間とか男・女間とかいう、間関係のアンチノミーがなくなってしまうものだから、なつかしきあの子ども、なつかしきあの男なるもの、女なるものを描こうとすると、表裏に分裂してしまうのだ。半死半生だから、生の喜び・充実、死の静謐・平安の追求に誠実である、生不在、死不在の世界に誘われてしまっ。岩瀬成子は私の求める児童文学作者ではないけれど、彼女の誠実さは疑いようがない。（さいしゅ・ささる

児童文学

最首 悟

氏 東京大学助手・生物学専攻